

# 新建築

SHINKENCHIKU:2007

2

集合住宅特集



# 連歌 ランドスケープ

第10回 スイス人ランドスケープアーキテクトの旅行ノート

執筆 クリスチャン・チュミ

写真 クリスチャン・リヒテンベルク

今回の「連歌」は、少し切り口を変えて、海外のランドスケープアーキテクトからの発信である。今回の発信をしてくれたのはスイス人のランドスケープアーキテクトであるクリスチャン・チュミ (Christian Tschumi) 氏である。

私とチュミ氏は、米国パークレーのピーター・ウォーカー事務所で働いたことがあるのが縁となって、ここ十年来の友人。と言っても、同所で重なって勤務した期間はなく、私の方が先輩で、私が今から約10年前にピーター・ウォーカー事務所を辞めたあとに、クリスチャンがハーバードの大学院でランドスケープを修めた後に入所した。当時私は辞めた後であったが、「Hiko Mitani」はすでに事務所の「伝説上の人物」になってしまっていたと言う。その後、彼が日本に初めて来た時、既に日建設計に勤めていた私を訪ねてきてくれたのが、最初の出会いか？

ちなみに、クリスチャンは昔から優秀なデザイナーであるばかりでなく、思想家でもあった。ピーター・ウォーカー事務所での修業の後、なぜか日本にやってきて京都大学の博士課程に入り、近代日本の著名な造園家「重森三玲」の研究で博士号を取得、数冊の著作をしている。その後も、ブラジルの有名な造園家ブルーノ・マルクスの作品を訪ねたり、米国ワシントンDCジョージタウンのダンバートンオークスというところでランドスケープの研究生活を送ったりで、多方面にわたり活躍する。

現在はスイスのチューリヒにあるスイス連邦工科大学にてランドスケープの主任教授であるクリストファー・ジロー氏の下で教鞭を執る傍ら、チューリヒ郊外のMETRONという大手の総合設計事務所で、ランドスケープの部門を束ねている。

かと思えば、日本を引き上げてスイスに戻る時には、チャッカリと若くて美しい日本人の嫁さんを連れて帰る、という目配りを欠かさない元氣一杯離れ業のランドスケープアーキテクトである。はてさて、どんな「連歌」になりますやら、ヨーデルでなければよいが……… (三谷康彦/日建設計)



## はじめに

この印象記は、2006年の11月に2週間にわたってスイスから日本に休暇で来た少人数のランドスケープアーキテクトのグループが、日本の各地を旅して回った時の「ランドスケープ」の印象記として、グループを引率したクリスチャン・チュミ (訳者注:スイス人ランドスケープアーキテクト) が代表でまとめたものである。

旅は、秋の紅葉真っ盛りの京都から始まり、岡山へ移動、その後、直島、高松、大阪、高野山へと続いた。

内容は、街とランドスケープ、そして人と文化に関しての、旅を共にした数人のスイス人ランドスケープアーキテクトの個々人の観察や考察の記録でもある。

この記録は、日本の文化というものにはさほど通じていない外国人ランドスケープアーキテクトたちの日本の第一印象でしかないが、彼らの都市やランドスケープ、人や文化を見る目は常に新鮮で先入観がない。

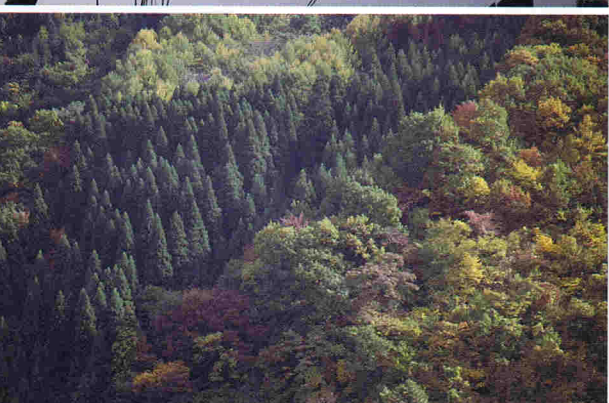
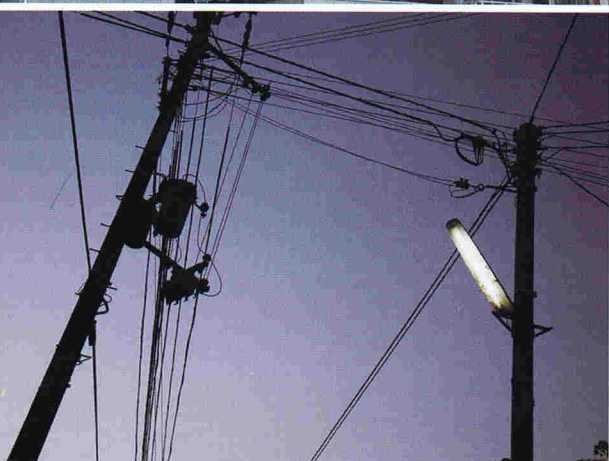


## 旅の移動手段

スイス人ランドスケープアーキテクトのグループは、言うまでもなく空路で日本の関西国際空港旅客ターミナルビル (本誌9408) に到着。

日本滞在の最初の土地である京都にいる間は、レンタル自転車





を各自のメインの移動手段とし、必要に応じてバスやタクシーなどを使用した。そして都市の間の長距離移動には鉄道や新幹線を利用し、四国に向かうために瀬戸内海を渡るにあたっては、あえて船を利用した。こういった移動のスピードや、利用による「身体感覚」のまったく異なる交通手段を使用することにしたのは、その場その場のランドスケープ体験をより多様なものとし、ランドスケープに対しての感性を、より敏感なものにすることができると考えたからである。

#### 街や都市、建築

日本の都市は外国人の目には、どちらかと言えば秩序に乏しく、明快な「構成」になっていないと映る。ひとつの例を言えば、巨大な超高層ビルと小さな古びた木造の建物が横並びで建っていたりする。

また、都市中での多くの建物は2～3階建てなどの比較的低いビルがほとんどで、そのことが土地や地面の利用を超過密にしているようにも見える。その結果、都市的な状態はどこまでも広がっていくことになり、その都市の拡散感は、はっきりと認知できるような始まりも終わりもないものとなる。

都市内の建築に関して言えば、ほとんどは中庸で平凡な意匠であるが、中には素晴らしくきらりと光る建築が混じっているようだ。詰まるところ、日本の都市も海外の都市と大きくは変わることはなく、建築的には玉石混交というところのようだ。

中でも、街のあちこちで見かける今流の茶色っぽいタイルのファサードをまとったマンション。これらは、あの歴史的に、そして世界的にも有名な住宅としての「町屋」を継承した姿なのだろうか？だとすれば途方もない「継承」と言うほかはない。日本人は、これが本当に現代を生きるための好ましい住まいと考えているのだろうか。

そして街の通りの頭上に、延々とたなびく電線の群れや束は、ほぼ例外なく決まって外国人をびっくりさせる。

また、大きな都市に見られる「公共的空間」のほとんどは、まったく面白みに欠ける。

それらの公共的空間は、欧米ランドスケープデザイナーの中途半端で下手くそなコピーであったりする。

さらに悪いことにはそれらの空間に、趣味の悪い花時計などといった通俗な「お飾り」が添えられていたりするのはなぜか。

日本はいまだに、人びとが利用するための外部空間を用意することには、歴史的に考えてもまだ育成途上・未発達のように、外部空間の所有者もデザイナーも共に、その形や外部の空間の意味するところを模索しているように見える。

# 都市農園

## 都市農園の風景

### ランドスケープ

都市部から少し離れると、ランドスケープ景観の面白いコントラストに気が付く。それは「平地」の部分が開発され、丘陵や山間部といった急峻な地形の部分は開発されずにいまだに残っているということだ。

この眺めは、丘陵や山間部の緑が風景の中で特別な場所として感じられとても素晴らしいと思う。

また、大きな河川の堤防内河川敷部分はゆったりとしていて、とても美しく、広々として気持ちが良い。このような大きな河川敷を用意したことはまことに賢く、素晴らしい土木計画だと思う。

この土木計画のお陰で、多くのほかの国々のように毎年のように洪水に悩む必要がなくなったわけだ。河川敷の立地する場所性と空間的な広がりにもよるが、大きなオープンスペース資産は保全されかつ有効に活用されるべきだと思う。

かたや河川敷は、多くの場合その土地固有の動・植物の自然の生育場所となる可能性が強い。したがって河川敷はとても貴重な自然保護区であるとも言えるのだ。場所によっては、過度に積極的な公共利用はむしろ控えるべきなのかもしれない。

また、農地の緑が都市的な開発地の中に入り込んでいる(取り残されている)のを見かけることがあるが、都市的な風景の中に「みどりのポケット」がそこそこで見られるのはとても興味深い。残念ながらこれらの「みどりのポケット」としての農地は遅かれ早かれ消えてしまう宿命にあるのだろうか。

何とかして、いくつかの「みどりのポケット」を「都市農園パーク」として人びとが使用・維持管理し、人との関わりを持って、都市内で保全できないものであろうか？

「庭園」に関して言えば、日本には、小さな茶庭から広大な池泉回遊式庭園、抽象的な枯山水の庭まで、ありとあらゆる種類の庭園が揃っている。それらすべてに共通しているように見受けられるのは、自然に対しての人間の「高度な支配」であろう。庭園の中ではほとんどのすべての樹木(に代表される植物全般)は、程度や手法の差こそあれ、人間の手で仕立てられ刈り込まれる。

松やモミジ、ランダムに植栽された灌木類や地被植物に至るまで、手が入られ人間の支配が行き届いている。

このような自然に対しての巧妙な人の関わり方・手の掛け方は、われわれ西欧のランドスケープアーキテクトを驚嘆させ、同時にぎょっとさせる。

### 日本の人びと・文化・環境

日本人は、自然との関わりにおいて、相反し矛盾する方法論を持っているようにも見受けられる。

文化的な側面から見れば、自然というものを「生け花」という芸





術で室内に取り込み、自然の風景を掛け軸や襖絵などにおいての「絵画」として愛で、そして世界に誇るいくつかの名園として庭園に映し込んでいる。

また、日本人は美しく移り変わる自然風景のもと、満開のサクラの花の下で家族や友人たちと杯を酌み交わすのが大好きだし、秋の紅葉の時期には赤く染まったモミジの風景写真を、数え切れないほど撮影するのも大好きだ。

かたや、日本人が「フルスケール」の自然というものと対峙する場合にはかなり違ったやり方になる。

土地としてのランドスケープを見ても、森や植林地、水田や畑、都市や街、道路あるいは高速道路などといった方法で、どんなに小さな面積の土地であろうとも余すところなく使い切ってしまうのだ。

今や、元々の自然が残っている場所というのは、現代の日本ではほとんど見つけ出せないのではないか。

この完璧なまでの、自然や自然資源の「利用手法」は、土地に対してだけでなく海に対しても同様に展開されている。

そこでは、あたかも今を生きる日本人がこの地球の最期の世代であり民族で、もう未来などないかのように、海や海の生物相を破壊し消費しているようにも見える。

日本人が、小さなスケールのランドスケープにおいて見せる、自然に対する愛慕の気持ちや思いやりは、大きなスケールになったとたんに消え失せてしまい、まったく見えなくなってしまっているように、われわれ西欧人の目には映る。

それとも、日本人の持つ、「人と環境や自然との調和」を希求する伝統的な気持ちというのは、ある一定のローカールスケールに対してだけ有効だったのであろうか？

上記のように、現代日本の「ランドスケープ」に対してのいくつかの批判的な考えや意見を出させていただいたものの、今回スイスから日本を訪問したランドスケープアーキテクトは全員、日本という国をよりよく知るところとなり、例外なく日本に好感を持つこととなった。

そして、この旅の印象は、全員にとって多様で、強烈で、しかも強く記憶に残るものとなった。

また、ランドスケープの専門家としてメンバー全員は、日本人が自らを取り巻く環境を自分たちに適合するように献身的にそして一生懸命に方向付けをしていることを認め、大いに感動した。

それに加えてわれわれは、日本に来て接した人びとの、とても友好的で優しい心遣いのある態度や、訪問した各地の素晴らしい郷土料理の数々には、もっと感動した。

そして最後に、全員が、紅葉に色づいた美しい庭園との恋に落ちってしまったに相違ない。

(翻訳: 三谷康彦/日建設計)